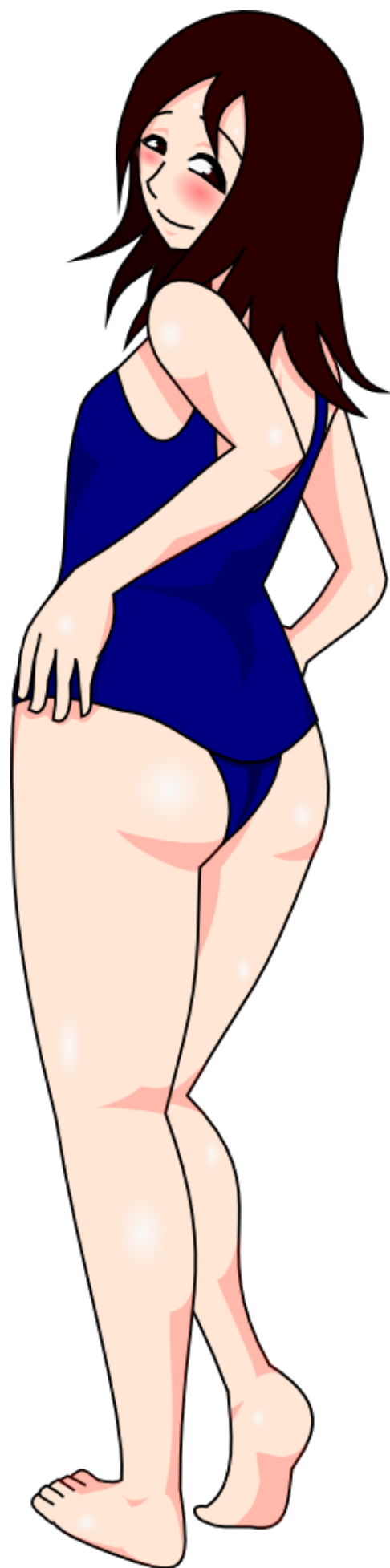


男子  
美術部  
女装  
デッサン

女装、ヌード、勃起、デッサン



二角レンチ

体験版

R-18

# 目次

部活の勧誘、部室でオナニー .....	3
勃起ヌードデッサン、手コキ射精 .....	17
女装セックス、童貞喪失 .....	36
原作利用権 .....	45
プリンタでの印刷方法 .....	47
奥付 .....	48

# 部活の勧誘、部室でオナニー

入学式の後、クラスで集まってちょっと話をしたらもう解散だ。引っ込み思案な僕はまだクラスの誰とも話せなかった。

まあまだ初日だ。これから頑張って友達を作ろう。友達が出来るとかどうかの不安をとりあえず押さえ込む。

あちこちで部活の勧誘が行われている。運動部の女子たちは体操服姿で、まぶしいふとももを露わにしている。たった一つ二つ違うだけなのにすごく大人の体つきをしている。僕はあちこちにいる健康的なふとももや大きな胸に目がいった。

それらをちらちらと見ながらゆっくり歩いていると声をかけられた。

「君、新入生だよ。部活はもう決まった？」

顔を上げると、きれいな女の人がいた。

いや、違った。男だ。男の制服を着ている。

びっくりした。女みたいにきれいな顔。首まで伸ばした髪。やわらかいほほえみ。男だとわかってても女の顔に見える。声もなんだか中性的で男と言うよりは女の声に近かった。

その人はにっこり笑う。女の人に笑いかけられたみたいでドキドキする。顔が熱くなってきた。赤くなっていないといいけど。

「は、はい。新入生です。ええと、部活はこれから決めようと思って、こうして勧誘を見て回っているんです」

「ふうん。やたら女の子ばかり見ていたみたいだけど」

ぎくりとする。そんなにばれれば良かったのか。そこまでじろじろ見ちゃっていたかな。

「ちょっとこっち来て」

「え、あの」

彼に手をつかまれる。何てやわらかい手だ。男の手とは思えない。温かい。きゅっと握られるとどうしようもなくドギマギする。

本当に男なのかな？ 女の人が男の制服を着ているだけじゃないのか。

そう思えるくらい女っぽくて、それに何だか色気があった。

だから手を引かれると、逆らうことなくついていってしまった。

勧誘が行われている人混みから離れ、人気の無い校舎の陰に連れていかれる。

「あの、すいません。でも女の子ばかり見ていたわけじゃなくて」  
しどろもどろと言い訳する。そもそも何でそんなに怒られることなのかわからないが、とりあえず謝った。

「あはは。別に叱るわけじゃないよ。安心して。僕らの歳だと女の子の体つきはぐんと女っぽくなるからね。目がいくのはしょうがないよ」

ほっとする。どうやら女の子をじろじろスケベな目を見たことを叱られるわけではないようだ。

「部活の勧誘だよ。君、美術に興味ある？」

美術部の先輩か。でもあいにく興味は無いので素直に答えた。

「別に興味無いです」

これで引き下がると思ったのに、予想外の答えが返ってきた。

「そうかあ。それはよかった。そういう人ほどいいんだよ。部活見学して行ってよ」

「え、あの、ちょっと」

美術部じゃないのか？ 何で美術に興味無いのがいいのだろう。

先輩の手はとてもやわらかくて、後ろ姿はとてもきれいな女の人みたいに見えて、その手を振りほどくのが惜しく思えた。だから手を引っ張られるままのこのことについてしまった。

このとき手を振りほどいて逃げていれば、僕の人生は確実に違っていただろう。僕の人生はここで大きく変わることになる。

「連れてきたよ」

先輩が扉を開けて入った部屋は狭かった。普通の教室の半分ほどしかない。そこにイスがいくつもあり、座って何人かの男がスケッチブックに鉛筆を走らせていた。

男たちは僕たちが入ってきたので顔を上げた。ごつい。顔も身体もごつい人たちばかりで何だか怖くなった。

「あの、僕、帰り」

「見学したいってさ」

そんなこと言っていない。僕は口をぱくぱくとさせた。

怖い男の人が立ち上がる。全員上級生だろう。僕は何をされるのかわからなくてすくみ上がった。

一人がずかずかと歩み寄ると僕をじろじろとにらむ。まるで品定めしているようだ。一体何を見定めるといなのか。それは後にこの身を持って思い知ることになる。

怖い人が僕をひとしきりながめたあと、急ににっこりと笑い出した。

「ようこそ。男子美術部へ。歓迎するよ」

何ていい笑顔なのだろう。さっきまでの恐怖心を吹き飛ばすほどの破顔の笑み。見た目で判断してはいけないということの典型に思えた。

「さあさあ入って。おい、入部届け」

その怖い顔の先輩があごで指示すると、イスに座っていた他の先輩が立ち上がり、用紙を持ってくる。

「あの、僕、入るわけじゃ」

「まあまあ。とりあえず仮入部だから。いやなら辞めればいいんだし」

僕を連れてきた顔のきれいな先輩が僕の肩に両手を置く。ふわっと女の人みたいないい匂いが舞った。

何だ。どの先輩もにこにこしてやさしそうだけど、言っている内容はとても強引だぞ。

しかも入部届けに記入しないと帰してもらえなさそうだ。やばい。こんな強引な勧誘をしているところはやばい。

僕はイスに座って用紙に記入する。この後、先生に相談した方がいいかもしれない。

「心配ないよ。みんなやさしいから。本当に」

顔のきれいな先輩がそう言う。本当にと念を押す方が怖いのだが。

とりあえず、この場はやりすごそう。そして先生に相談しよう。

「あの、男子美術部って何ですか」

「男子だけの美術部だよ。まあ聞き慣れないよね。説明してあげる」

先輩がつかつかと机の上のパソコンに向かう。そしてカチャカチャと操作する。

「こっち来て。ボリュームは絞ってあるから。外に聞こえたらまずいしね」

何だろう。パソコンに近づく。

ビデオを再生している。女のあえぎ声がして、セックスしている

映像が映し出される。

「うわ」

「こういうの、よく見る？」

「い、いえ、だって」

ちょっとだけなら見たことあるけど。でもこれ。

「む、無修正だ」

「そう。それも売っている物じゃないよ。もちろん裏の物でもない」

「何ですか」

「よく見てごらん」

じっと見る。制服を着た男女がセックスしている。よく撮れている。画面が少し暗いがはっきりとアソコに出入りしているところまで見える。

「あれ、これ、この学校の制服？」

「そう。これはここでしか見られない、この学校で撮影したものなんだ」

画面を食い入るように見る。男女ともかなりの美形だ。さらに目線とか動きとか、あきらかにカメラを意識している。

「すごい。はあ」

前かがみになる。股間が痛いくらい勃起した。

「この部活に入れば、こういうのたくさん見られるよ。ネットとかでは見られない。ここだけでしか見られないものだよ」

こんなのが他にも。すごい。エロすぎる。アングルとか画質とかすごくいい。取り慣れている人が撮影したに違いない。

何よりこの学校で撮影したものだ。ただのエロビデオとは興奮の質が違う。こんな興奮、これではなくては味わえない。

「コピーして流出すると困るから、コピー不可にされている。だから見たければ、ここに来るしかないよ」

これで僕を釣ろうというのか。でもこれは、確かにこのためだけでも部活に入りたい。

「先に入部届けを書かせたのはね、これを見せるためだよ。だって言いふらされたら困るだろ。わかるよね」

部員以外の誰にも言うなってことか。僕はこくりとうなずいた。

「男子美術部はね、こういうのを見たり、話をしたり、スケッチしたり。まあ気楽なものだよ。他の部みたいに厳しいことやいやなこ

とは無いからね。帰宅部よりは有意義に放課後を過ごそうってだけの集まりさ」

「ええと、それってつまり、普通の美術部は他にあるってことですか」

「あるよ。でも入れるのは女子だけ。部員がモデルになってのヌードデッサンもあるからね。それ目当ての男が入れないようにしてあるんだ」

「え、女子って、ヌードデッサンがあるんですか」

「見学も禁止されているよ。まあ芸術のためって言っても僕らの歳では性欲抜きに見られないだろ。だから男子が入れないように、男子と女子で美術部を分けてるってわけさ」

そうなのか。まあたしかに、女子のヌードデッサンがあるって言うなら男がわんさか押し寄せるだろう。

「それで、同じ美術部だから同じことをするんだけど。まあ男子だけで交代でヌードデッサンってさ、男子集まらないだろ」

「ええ。男子もヌードデッサンあるんですか」

「そう。だから普通に勧誘すると人が来ないんだよね。それでちょっと強引な勧誘だったけど、まあ代わりにこういう役得があるからこれで許してねってことさ」

強引だって自覚があるのか。先輩たちはみんな陽気に笑う。みんな自分のときもこのビデオを見せられ半ば強引に入部させられたらしい。部の伝統だと言って笑っていた。

「ね。みんな同じなんだよ。それに結構楽しいよ。これを見たり話したり。ちゃんと部活らしいこともするけど、あくまで部活として活動している振りだから。女子みたいにコンクールに出したり吐き気のする絵の具の匂いに悩まされたりしない。ちょっと鉛筆でスケッチやデッサンするだけさ。楽なものだよ」

何だか楽そうだな。それに先輩たちはみんなよく笑う。顔が怖くて身体がごついから初めはびびったけど、いい人ばかりのようだし。

「一応入部届けは出すけど、初めの一週間ぐらい顔出して、どうしても他がいいなら辞めてもいいからさ。入ってみなよ。楽しいよ」

「うーん、そうですね。楽しそうですし。でも、厳しいこととか無いですか」

「無い無い。気楽なものだよ。僕たちは部活をしているけど、半分

はここに部員を置いておくためなんだ。だから部活の内容自体は温い遊び程度でかまわないんだ」

「？　どういうことですか」

「これを見てごらん」

先輩がパソコンを操作して、別のビデオを再生する。この学校の女生徒が制服をはだけてセックスしているが、男の方は制服を着ていない。それどころか、大人の男性だった。

「これつい最近の物だよ。この男の人、誰だかわかるかい」

「わかりません。誰ですか」

「今日会っているはずだよ。入学式には先生全員参加しているからね」

「え、この人、この学校の先生なんですか」

「この男子美術部の先生さ」

「じゃあ、もしかしてこれって」

「そう。この部室でセックスしているんだよ。さっき見た学生同士のセックスも男の方はこの先生さ。先生がここの学生だったときに撮った物や、今先生しながら教え子とセックスしているときに撮った物なんだよ」

「うわ。へええ。つまり、この部屋は先生のヤリ部屋ってわけですか」

「そういうこと。君は話が早くていいね。僕らは部活をしているけれど、先生がこの部屋を自分の好きに使うために僕らを置いて、他の連中が入って来られないようにしているのさ」

「先生が女の子を連れ込むときだけ僕らはよそで時間を潰す、と」

「ちょっと違うなあ」

「違う？」

「君ならぴんとくるんじゃないかな」

「まさか」

「そのまさか。このビデオを撮影しているのは僕らだよ。もちろん見張りも立てる。でないと安全にセックス出来ないだろ」

「撮影しながら、生でセックス見れるってわけですね」

「それだけじゃないよ」

「ええー。本当ですかあ」

どうしてもにやける。それだけじゃないってことはつまり。



「先生が楽しんだあと、僕らにも回してくれるんだよ。あ、もちろん合意の上だよ。レイプなんかしないからね。撮影料代わりさ」

「本当に、合意の上ですか？」

「うん。先生モテるからね。格好いいだろ。僕らにおこぼれをあげるのも含めて納得した女の子だけを連れ込んでいるんだ。それでもいいから先生とエッチしたがる女の子は多いんだよ。ほら、ビデオ見てもいやがっていないだろ。隠し撮りじゃないよ。カメラもいいアングルで撮れるように移動しているし、カメラを意識して視線やポーズを取っているだろ」

たしかに、こんなにカメラを意識して顔を見せたり撮らせたりしているんだ。合意の上だろう。

でもこうして撮影している以上、その後まで合意かどうかはあやしいものだ。この映像をたてに何とでも出来る。

「ま、先生は新生入生にしか興味ないからね。初めの二ヶ月くらいはこういうことはないんだけど。先生が口説き落とした子から順に連れ込むからね。去年は二十人くらいかなあ」

「そ、そんなに」

「君、生で中出ししたことある？」

「ありません。というかセックスしたことないんですけど」

「そうなのか。じゃあこれで童貞卒業だね。生で中出し気持ちいいよお」

「いくら何でもまずくないですか。妊娠したら」

「大丈夫大丈夫。ほら、ビデオで先生が中出ししているだろ。だからもしものことがあっても先生が責任取るからさ。安全日の子しか連れてこないし。このビデオだって先生と女の子しか映っていないだろ。万が一のときは先生一人が全部ひっかぶる。僕らが撮影に協力したことやおこぼれにあずかったことは絶対言わないでくれる。そのために僕たちがするときは撮影しないんだよ」

「ほ、本当に、大丈夫なんですか」

「大丈夫。僕も去年はびくびくしていたけど、一年経てば平気になる。ほら、他の人もみんな平気だろ。無事なんだって。何も心配することないよ」

こんな丸見えビデオが見られる。しかも二ヶ月程度それを楽しんだあとは本当のセックスが出来る。それも何人ものかわいい女の子

をとっかえひっかえ。生で中出しして、しかも後腐れがない。

「どう。楽しそうだろ。部活」

「ええ、とっても楽しそうですね」

「とりあえず、この入部届けで入部するけど、一週間経って辞めたくなったら辞めてもいいから。でも二ヶ月もいれば、きっといいことあるよ」

「そうですね」

「ふふ。ずいぶん勃起しているね」

「これは、エッチなビデオ、見ているから」

「オナニーしていいんだよ。ここには男しかいないんだから、遠慮しないで」

「そんな。恥ずかしいですよ」

「大丈夫だよ。いつもみんなでしているんだ。すぐ慣れるよ」

そういうと先輩はズボンを下ろす。パンツも下ろしてペニスを取り出す。

「う、わ」

女みたいにかわいい先輩が、ペニスを出してしごいている。むくむくと大きくなるそれは立派な男なのに、女みたいな指でしごいているからとてもいやらしい。

他のごつい先輩たちも、じゃあ俺もと言ってズボンを下ろす。身体と同じくごつくて太い棍棒をこれでもかと強くしごく。

「ほら君も。みんなでやれば恥ずかしくないから」

「え、ええー」

しゅっしゅといやらしい音が鳴り響く。パソコンからいやらしいあえぎ声が鳴り響く。まさにこの部室で撮られたモロ見え生セックス。そのビデオを見ながら男たちがオナニーに励んでいる。

「このビデオはいつのですか」

「去年のだよ。僕はまだ新入生だった。初めて撮影に参加したときのだからよく覚えているよ」

「このあと、この女の子としたんですか」

「したよ。ここにいるみんなしている。僕はこの子で童貞喪失したんだ。すごく気持ちいい初体験だったよ。やっぱりセックスは生に限るね。まあ、ゴムつけてしたことないけど」

この女みたいな顔した先輩でも、男らしくセックスしたんだ。女

の子にたぎる肉棒を突っ込み射精したんだ。

「ほら、君もオナニーしなよ。はあ。みんなでしごいている音とか聞くと、何だかすごくエッチな気持ちになるだろ。我慢しないでいいよ。君の歓迎会だ」

こんな歓迎会があるだろうか。でももう我慢出来ない。たしかにみんなでエロいビデオ見ながらオナニーしているこの雰囲気は淫靡な興奮をかき立てる。

きっとみんな、このビデオの映像だけでなく、この女の子とセックスしたことを思い出しながらオナニーしているんだ。この部室でみんな、女みたいな先輩や、たくましい先輩たちが女を取り囲んで一人ずつ順番に挿入していく。それを想像するだけで興奮が高まる。

僕もいずれ、ここで女の子と初体験する。

興奮にペニスがいきり勃つ。僕はズボンとパンツを急いで下ろす。

みんなが僕のペニスをのぞき込んでくる。

「み、見ないでくださいよお」

「いやいや。立派なペニスだよ。恥ずかしがることはないさ。他人のペニスって気になるだろ。君もみんなのを見たじゃないか」

たしかに、別に好んで見たい物でもないが、勃起している他人のペニスというのはとても気になるものだ。自分と形や色がどう違うのか、そして何より大きさがどれだけ違うのか。

先輩たちはみんな僕よりはるかに大きかった。女みたいな先輩でさえ僕より明らかに大きい。

「み、みなさん大きいですね」

「なあに。君もたくさんセックスしたらこんな風に大きくなるよ。成長期にいくらセックスしたかでペニスの大きさは決まるんだから」

「そうなんですか？」

「そうだよ。僕もたくさんセックスしたからこんなに大きくなったんだよ」

女みたいにかわいい先輩が、凶悪なくらい大きなペニスを僕に近づけ見せつける。

「君も、この部活でたくさんセックスしたら今より大分大きくなるよ。楽しみだろ」

「は、はい」

すごく楽しみだ。そうか。みんなセックスしているからあんなに

大きくなったのか。成長期なものな。セックスしているかしていないかでえらく変わるのだろう。

僕はパソコンの画面に向き直る。人前でオナニーするのは恥ずかしい。でもみんなしているからそれほど気にならない。興奮して激しくしごいた。

みんなはあはあ言っている。僕と同じようにパソコンの画面を見て興奮しているのだと思った。

でも違った。みんなが見ていたのはパソコンの画面に映るエロい映像ではなかった。目の前にある生のエロい光景、僕のオナニーを見て興奮しているのだった。

僕は画面を食い入るように見ているからそんなことは気付かなかった。こんなにはっきり映る無修正のビデオを見るのは初めてだった。それもこの学校で、この部屋で、教師と教え子がセックスしている。こんなに興奮する物は他にない。

そして僕以外のみんなにとっては、童貞処女のオナニーほど興奮する光景は無いだろう。この純真無垢で無防備な男の子をどう犯してやろうか考えながらするオナニーはセックスにも匹敵するほどの興奮だろう。

先輩が言うことはほとんどが本当だった。でも一つだけ、うそが混じっていた。

このビデオに映る女の子で、かわいい顔した先輩が筆下ろしをした。そこまでは本当だった。この女の子が、ごつい男たちの中で唯一かわいい顔した童貞にだけ興味本位で筆下ろししてあげたのだ。

他のむさくるしい男たちはセックスを拒否された。レイプなんてするわけにはいかない。先生がそれは許さない。安全を確実に保証することで先生は教え子をここへ連れ込めるのだ。

目の前でセックスを見て興奮しきった男たちは、女の子とセックスはしなかった。代わりに誰としたのか。誰の穴に次々太いペニスを突っ込んだのか。

かわいい顔した先輩は、女の子に挿入して童貞を失った悦びに浸りながら、たくましいペニスをお尻に受け入れていった。そのときの、前も後ろもセックスしているあの快感を思い出して顔を紅潮させていた。

僕はそんなことにまるで気付かず、オナニーに励んでいた。

「あ、う、出ちゃう、出ちゃう」

急激にこみ上げた。夢中でしごいていたので射精寸前で止められなかった。

きょろきょろと見回す。ティッシュが無い。いつもの自分の部屋とは違うのだ。

僕はペニスを両手で握りしめてイスから立ち上がった。

「はい、ティッシュ」

先輩がティッシュを渡そうとしてくれる。僕は射精をこらえながらそれに手を伸ばす。

先輩はわざと、手を伸ばさないと届かない位置で待っている。僕はそれがわからず、必死になってティッシュを手を取った。

間に合わない。亀頭を押さえる手のひらに熱いものがあふれた。

「あ、う、うううううー」

泣きそうになりながら手の中にお漏らしした。

みんな呆然と見ていた。でも実は、じつくりと目に焼き付けていた。僕は恥ずかしさのあまり目を瞑ってじっとしていた。

「あう、うう、うふ、ううううん」

お尻をもじもじと振る。亀頭を握った手の隙間から精液が漏れ出しぽたぽたと音を立てて床に滴る。

「ああ。ごめん。間に合わなかったね」

先輩がティッシュを握ったまま固まる僕の手から、そっとティッシュを取り出す。

「おわびに拭いてあげる」

先輩は亀頭を握る僕の手をティッシュで拭く。

「じ、自分で、出来ますから」

「いいから。そんな泣きそうになって。かわいそうに」

女みたいな顔でそんなことを言われたらそれ以上拒否出来ない。恥ずかしいけど促されるままに手を開きペニスをさらす。

僕は恥ずかしさにうつむいていたし頭が混乱していた。だから気付かなかった。みんなが精液まみれでひくひくする僕のペニスを凝視していることも、それを見ながらオナニーを続けていることも。

「たくさん出たねえ」

先輩はティッシュを取り替えながらやさしく拭ってくれる。僕のペニスを握り、竿も亀頭も玉も全部拭いてくれた。

先輩には悪いけど、女の人に拭かれているみたいでドキドキした。やさしく握ってくれる手も、ティッシュで拭ってくれる触り方も気持ちよかった。

男の人なのに、女の人みたいで。ああ。僕、いけないことを考えている。

「やべえ。俺も出そう」

周りのごつい先輩たちが次々とティッシュを手に取り射精していく。まるで僕に見せつけるように、僕の方にペニスを突き出し亀頭にあてがったティッシュに射精する。その不自然さに混乱している僕は気付かなかった。

「よし。きれいになったよ」

かわいい先輩が、僕の顔を見上げてにっこり笑う。

「あ、あの、すいませんでした。精液、お漏らししちゃって、その上拭いてもらって」

「いいって。人の世話するのは慣れているから」

兄弟でもいるのかな。面倒見がよさそうだな。

立ち上がった先輩のペニスはビンビンに反り返りひくついていた。

「あ、ごめんなさい。僕のせいでオナニー中断させちゃって」

「いいって。気にしないで。みんな射精したみたいだし。僕もすぐ出すから、それで今日はお開きにしよう」

かわいい先輩はそう言うと、僕の目の前でペニスを握ってしごき始めた。

「せ、先輩」

「ごめん、ティッシュくれる？」

「は、はい」

僕はティッシュの箱から何枚か抜き取って先輩に手渡す。

「ん、もう、出る」

僕はいけないと思いながらも目が離せなかった。かわいい先輩は腰つきも女の子みたいで、お尻は大きいしふとももはとてもきれいだった。

女の子にペニスが生えている。そうとしか思えなかった。だからとてもいやらしいものに思えて見ずにはいられなかった。

「ん、あああ、出る」

先輩が亀頭にティッシュをあてがう。腰を突き出す。ペニスが僕

の前に差し出される。

「う、うー」

女の子みたいな声を出して、先輩が射精する。腰を八の字にくねらせながらぐくぐくと何度も振る。

すごくエッチだ。男のオナニーなのに、女の子のそれを見ている気分だ。

精液出るところ見たいな。ティッシュが邪魔だ。とっさにそう思ってしまった。

「はあ。ふう。ああ。ふああ」

先輩があえいでいる。汗を浮かべ目を伏せたその表情はとても色っぽかった。

ドキドキする。どうして。相手は男だぞ。

「ふうー、気持ちよかった」

先輩がぐりぐりと亀頭をティッシュで拭う。そしてそのティッシュを離す。

「うっく、まだ残っていた」

ぷくっと鈴口から白い汁がにじみ出て、たらりと竿まで垂れる。その光景のいやらしさに鼻血を吹きそうだ。

「ごめん、拭いてくれる？」

「ば、僕がですか」

「さっき拭いてあげたでしょ」

「は、はい」

ティッシュを取って先輩の竿を握る。熱く太い竿がびくりと跳ねる。

「し、失礼します」

ティッシュでそっと、先端を拭う。その間も握ったペニスはまるで檻から逃れようと暴れる野犬のようにびくびく激しく跳ね回った。

力強い。かわいい顔してなんてたくましいペニスだろう。

ドキドキする。他人の勃起ペニスを握るなんて初めてだ。それがこんな、女みたいにかわいい先輩だとどうしても意識してしまう。

「ありがとう」

先輩にそう言われてはっとする。あわててペニスを離す。

「ふふ。これぐらいで赤くなっちゃって。かわいいね」

先輩の方が百倍かわいいですよ、とは言えなかった。

「さてと、じゃ、明日から放課後になったらこの部室に来てね。たいてい誰か先に来ているから。もし誰もいなかったら少し時間を潰してから来るといいよ」

「わ、わかりました」

何だかいろいろ恥ずかしくなってきた。僕は急いでズボンとパンツを上げた。僕が真っ赤な顔をしながら男のペニスを拭く様子を、他のみんながじっくり見ていたこともまるで気付かなかった。

帰り道。まだドキドキが治まらない。

手のひらをじっと見る。

先輩のペニス。大きかったなあ。すごく力強く何度も跳ねて、たくましくて素敵だったな。

もちろんそれは性欲の対象ではなく男のあこがれに過ぎなかった。僕もいつかあんな風に立派なペニスになるんだ。あの部活にいて、セックスに励んだら。

セックスか。僕には縁が無いと思っていた。僕みたいにさえない男に彼女ができるところは想像出来なかった。それが降ってわいたようなこの幸運。入学早々ラッキーだ。

たしかにあの部活に入ればセックス三昧だった。でもそれが、僕の考えるような男女のセックスではないとはこの時点では思いつくことすら不可能だった。

この後主人公はかわいい先輩と一緒に女装してデッサンされたり、たくましい部員たちに抱かれたりします。この体験版では以下にエッチシーンを抜粋して掲載しています。



# 勃起ヌードデッサン、手コキ射精

かわいい先輩が、パンツに手をかけて下ろす。ボクサーブリーフなのが残念だ。あれで女の子のパンツならさらによかったのに。

まだ大きくなっていないペニスが垂れている。それもかわいいと思った。でもやっぱり、ペニスは勃起している方がいやらしい。

「なんだなんだ。大きくしろよ」

「そうだ。ヌードデッサンは勃起に決まっているだろうが」

みんながはやし立てる。でもかわいい先輩は勃起しない。

「ええと、ごめんなさい。やっぱり初めての人の前では緊張しちゃって」

かわいい先輩が僕を見てそう言う。昨日は簡単に勃起していたのに。

「おい新入り。あいつを勃起させてやれ」

「え、何で。僕がですか」

ごつい先輩が僕の耳に顔を寄せてささやく。

「あいつ勃起を我慢しているんだよ。お前に手でしごいてもらいたがっているんだ」

「えええ。そうなんですか」

「あいつお前みたいな好みらしいからな。お前もまんざらじゃないだろ。どさくさにまぎれて尻とか触ってもいいからな」

いきなりそんなこと言われても、どぎまぎする。たしかに女の子みたいな先輩には触ってみたいと思っていた。あの大きなお尻をもんだりかわいい胸をなでたりしてみたかった。

「ほら、行け」

「で、でもお」

「おおい。新入りのせいで緊張しているんだから、新入りが責任取って勃起させてくれるってよ」

みんないいぞとかやれーとかはやし立てる。どうやら拒否権は無いらしい。

僕はおずおずとイスから立ち上がる。ペニスが痛いくらい反り返る。

みんな全裸で、かわいい先輩以外勃起している。その中で注目さ

れるのはとても恥ずかしいことだった。

かわいい先輩はにこにこして僕を待っている。僕はしかたがない振りをして、でも内心わくわくしながら先輩に近づく。

「せ、先輩」

「ん」

「僕のせいで勃起しないんなら、僕が勃起させてあげます」

「うん。お願いね」

女みたいな声。それも熱く潤った、期待のこもった吐息。心臓の鼓動が一気に早くなる。

女の子とエッチするみたいだ。

もちろん、下を見れば先輩のペニスが垂れ下がっている。でも近くで嗅ぐ先輩の肌の匂いはとても甘くて、しっとり湿っている。どんな男でも、女の子と裸でいるようで興奮するに違いない。

「あの、触ってもいいですか」

「いいよ。どこでも」

「どこでも？」

「僕のこと、女の子だと思って触ってくれるとうれしいな。でもちょっとだけだよ」

「は、はいいい」

声が裏返る。恥ずかしい。パニックになりながら僕は先輩の胸に両手を置いた。

「あん」

先輩がうれしそうな声を出す。

「あ、先輩の胸、やわらかい」

おどろいた。ぺったんこの胸なのにとってもやわらかく、指を立てて肉を寄せるようにもむと確かにもみ応えがあった。

「う、わ、やわらかい。すごい」

「あん。おっぱい触るの初めて？」

「はい。僕、童貞ですから」

「童貞の子に触られるのって、うれしい」

「先輩は、男が好きなんですか」

「今は僕のこと女の子として見て欲しいな」

どういう意味だろう。今はそういうノリでみんな遊んでいるのだから合わせろということか。それとも本当に女の子と見て欲情して

欲しいということか。

どっちとも取れる、わざとそういう言い方をしている。それ以上は追求出来ない。

「あ、先輩」

先輩が、僕に胸をもまれて勃起し始めていた。

「まだ駄目ですよ。触り始めたばかりなのに」

「だって。童貞の子に触られているって思うと興奮するのお」

「ああ。そんなに女の子な声出して。い、色っぽすぎます」

「お尻も触って」

先輩が、胸ばかりいじる僕の手を取ってお尻に導く。

「うあ」

やわらかい。信じられないほどやわらかい。僕は両手で抱えるようにお尻の肉をわしづかみにする。

「ふう、う、いいよ。もっと強くもんで」

先輩のお尻をもみもみする。なんてやわらかいんだ。でも強く握るととても弾力があって、もみ応えが半端無い。

先輩のペニスがびんっと上を向く。

「ああ。勃っちゃった」

先輩を勃起させるために触る。だからこれでおしまいだ。

もっと触りたい。女の子の身体だ。男なのに女の子のやわらかい身体をしている。

「せ、先輩」

「こっちも触って」

先輩がお尻をもむ僕の手をつかむ。そして自分のペニスに導く。

「先輩」

「握って」

女の子の声で、切羽詰まった声で、ペニスを握るように切望されたら逆らえない。何て切なそうな目だ。かわいすぎる。男を女よりもかわいいと思ってしまうなんて。

先輩の太いペニスをぎゅっと握る。すると先輩は、僕の手首を握ったまま上下させる。

「しごいて。はあ。はあ」

先輩がして欲しがらるからしごいてあげる。男のペニスだなんて嫌悪はまったくわからない。女の子のアソコを手で気持ちよくしてあげ

ている気持ちしかない。

「はあ、はあ、あ、くう」

女の声で、目の前で悶える先輩。抱きしめたい。抱きたい。猛烈にいやらしい気持ちが熱く高まる。

「こらこら。やりすぎだぞ」

ぎくっとして振り返る。ものすごくおどろいた。後ろを見るとごつい先輩がにやにやしていた。

「ヌードデッサンの時間だぞ。モデルは勃起していないといけない。射精したら萎えてしまうだろうが」

「あ、え、ああ、すいません」

僕はしどろもどろと答える。あわてて先輩のペニスから手を離す。

かわいい先輩が僕をにらむ。中断したことを怒っているようだ。

「す、すいません」

謝る。僕はどうしたらいいんだ。

「ん、いいよ」

かわいい先輩がにこりとする。僕はほっとした。

「続きはあとでね」

先輩は僕の耳に口を近づけ素早くささやく。女の子とエッチの約束をしたみたいで胸が熱くなる。

「よーし。じゃあ始めるぞ」

ごつい先輩がそう言うと、みんなスケッチブックを手取る。僕もそれに従う。

「同じ姿勢でじっとしているのはかなりきつからな。一分ぐらいでポーズを変える。だから全体をおおまかにとらえるか、一部だけを詳細に描いていけ」

「はい」

絵なんて描かない僕にとって、それはかなり難しいことだった。ちょっと描いているだけですぐに姿勢を変えられる。まるで追いつけない。

他の人はさらさらと描く。慣れているからか、みんな結構上手い。それに小さく描いている。なるほど小さく素早くしゃっしゃと描くと早く出来るのか。

見よう見まねでやってみる。まるでうまくいかない。簡単そうに見えるのにどうしてこんなに難しいんだ。

「ははは。慣れるまで大分かかるぞ。そんなにすぐ描けたら苦労しない。もっと肩の力を抜いて、しゃっしやとりズムよく描くのを楽しめよ」

「はい」

力が入りすぎなのか。気を落ち着けて描いてみる。

「そうそう。お前結構飲み込みが早いな。どうだ。くだらない石膏像とか描くより断然やる気出るだろ」

「はい」

本当にそうだ。モデルになっているかわいい先輩はいろんなポーズを取る。立っているだけではなく、マットに座ったり寝ころんだりもする。

それもいわゆるセクシーポーズだ。エロ本に載っているいやらしいポーズ。みんな楽しそうに次はこうして、ああしてとリクエストする。かわいい先輩も笑顔でそのリクエストに答える。

「お前も何かリクエストしろよ」

「ええ。僕はいいです。思いつきませんし」

「おおい、新入りがケツ広げて穴見せてくれって言っているぞ」

「ちょ」

なんてことを言うんだ。みんな大笑いする。

「もう、エッチなんだからあ」

かわいい先輩はすっかり女の子になって、恥ずかしがるしぐさをする。でも僕にお尻を向けてマットにひざをつくと、頭をマットにつける。

「よおく見てね」

先輩が、女の子みたいな大きなお尻の肉を手で左右に広げる。恥ずかしい穴が丸見えにさらけ出される。

「ほれ。よく見ろよ」

ごつい先輩が僕の頭をぐいっと押して広げられたお尻に近づける。

「う、わあ。きれい」

男のお尻なのにすごくきれいだ。そしてその奥にある穴もとてもきれいで薄いピンク色をしていた。

毛が生えていない。しわもすくない尻の穴は本当にきれいだった。ひくひくすぼまったりゆるんだりしているのがものすごく卑猥だった。

ごくりとつばを飲む。なんだこのいやらしさは。昨日見た無修正の女のアソコよりもいやらしく思える。

「はあ。はあ」

息が荒くなる。興奮しまくる。

「すごいだろ？」

「は、はい」

「入りたいだろ」

「は……えええ。そんな。まさか」

「ははは。なんてな」

ごつい先輩はばんばんと僕の背中を叩く。ちょっと痛い。

「よーし。大分デッサンもしたし。次いくぞ」

みんながイスから立ち上がる。

「次って何ですか」

「勃起デッサンだ。ポーズを取っているとしんどいからじっとしてられないだろ。だから寝そべって楽にした状態で、勃起だけを描くんだ」

「ぼ、勃起って」

「美術には大事なんだぞ。別に本格的な美術をやるわけじゃないけどな。勃起デッサンはなかなか機会が無いそうだ。当たり前だけど普通のヌードモデルは勃起しないからな。だから俺たちは逆に、そればかりするんだ。そのためにみんな裸で勃起しているんだぞ」

そのためって。そうなのか。何だか無茶苦茶変なことを言っている気がするが、今の雰囲気ではおかしくはないように聞こえる。

「俺たちはどこよりも勃起デッサンをする美術部だ。それだけは日本一、いや世界一だ。すごいだろ。世界一の美術部にいたって将来自慢出来るぞ」

自慢どころか人に言えるわけがない。みんなその冗談に笑う。

かわいい先輩がマットに寝転ぶ。勃起したペニスは寝転ぶと亀頭がお腹にかすかに当たっている。いやらしい。女の子にペニスが生えたように見えるからあまりにも卑猥すぎる。

そのかわいい先輩をみんなで取り囲む。スケッチブックを持った全裸の男たちに女の子が取り囲まれている。

なんて興奮するシチュエーションだ。僕もその男たちに混じっている。みんなペニスがびんびん跳ねている。僕と同じように興奮し

ているんだ。

「間近で見て、じっくり描けよ。出来るだけ詳細に。大きく描けよ」

「お、大きく」

「馬鹿。そういう意味じゃねえよ。用紙いっぱいに使って大きく描けって意味だ」

みんなどっと笑う。僕も一緒になって笑う。

楽しい。いやらしくておもしろくてすごく楽しい。人には言えないけれど、最高の部活だ。笑うことってこんなに楽しいんだな。いつもびくびく人の顔色をうかがう僕は、笑うことの楽しさを今まで知らなかった。

「よーし。みんな気合い入れて描けよー」

おお、とみんなが吠える。ばりばりと熱心に描きまくる。みんな真剣だ。こんな表情も出来るんだ。たくましくて顔もごつい先輩ばかりだけど、何だか格好いいなと思えた。やっていることはあれだけど、女が何かに打ち込んでいる男に惚れる気持ちが少しわかった気がする。

かわいい先輩は目を瞑ってじっとしている。ペニスがびくびく動いている。みんなに近くで見られながらペニスをデッサンされる。それってすごく恥ずかしくて、興奮することなんじゃなかろうか。

「お、垂れてきた」

かわいい先輩の亀頭がびくりと揺れると、とろりと一筋の先走りが垂れてお腹に滴った。

「うわ、エロい」

僕はそれを見ながらつぶやいた。

「ほれ、しっかり見て描け。下手かどうかなんて気にするな。エロいを見ながら描くのってそれだけで楽しいだろ」

「はい。すごく楽しいです」

「そうか。お前も絵の楽しさがわかってきたな」

絵自体は下手だが、確かにエロいモノをただ見るだけより見ながら描く方が何倍も興奮して楽しい。エロにはこんな楽しみ方もあるんだな。やってみないとこの楽しさはわからない。

先輩たちはさらさらと描きこんでいく。みんなすごい早さで鉛筆を走らせる。しかも上手い。たしかに美術部員としては別段上手くもないのだろうが、絵が描けない僕からすれば十分すぎるほど上手

かった。

なんと言ってもエロい。みんなのエロい気持ちが紙に塗り込められているかのようだ。つくづく絵は上手さだけではないと思いしらされる。僕もこんな、見る人に伝わるほどエロい絵が描けるようになりたい。

「あん」

かわいい先輩の女声がして僕はびくりとそっちを見た。

ごつい先輩の一人が、かわいい先輩の乳首をつまんでいた。

「んー、何だかおかしいなあ」

その先輩は、スケッチブックを見ながらうなっている振りをして、かわいい先輩の乳首を弄っていた。

「俺も、どこがおかしいかなあ」

他の先輩も自分の絵のおかしいところを探す振りをしながらかわいい先輩を触る。乳首、胸、お腹、ふともも。あちこちをまさぐっていく。

「先輩、あの」

「お前も触れよ。触りたいだろ」

「で、でも、いいんですか」

「あの顔見ろよ。いやがってないだろ」

かわいい先輩は目をとろんとさせている。ほほを染め、唇はおねだりするように突き出されていた。

僕はドキドキしながら先輩の足をなでる。やわらかい。ふくらはぎを行ったり来たり、かするようになぞっていく。

「遠慮すんなって。もっと触りたいところあるだろうが」

僕はそう言われて、そのまま手を上げてふとももの内側をなでる。

「あっふあ」

かわいい先輩がびくりと跳ねる。

「かわいい。先輩かわいい」

「な、本当の女みたいでたまらねえだろ」

「は、はい」

「先生が女連れてくるのはまだ二ヶ月くらい先だ。それまではこいつを女代わりに楽しんでおけ」

「で、でも、いいんですか」

「無修正ビデオよりもエロいだろ。それともビデオの方がいいか？」



僕は首を左右に振る。男とはいえほとんど女に見える。顔なんて並の女よりもかわいいくらいだ。それがお触りしてもいいなんて。ビデオなんか見ている場合じゃない。

みんなスケッチブックを後ろへ放る。そして両手でかわいい先輩の身体をまさぐりはじめる。

すごい光景だ。たくましいうでが何本も、かわいい女の子の身体をなでまわす。でもその子は男の子で、びんびんに勃起したペニスまでようしゃなくたくましい手の餌食にされている。

「みんな、ペニスも触ってあげるんですね」

「こいつのペニスは何か触ってみたくなるだろ。ほら。ぐいぐいしごかれて喜んでいるしな」

「そうですね」

「ほれ、遠慮するなって。お前も触れ、触れ」

もう我慢出来ない。何てエロさだ。僕はたくましいうでに割り込むように華奢な手を伸ばしかわいい先輩の身体を触る。

やわらかい胸。むっちりしたふともも。丸いお尻。くびれた腰。

細い首をなで上げる。かわいい先輩は猫が甘えるみたいにのどを鳴らす。

こんなにかわいい人がいるのか。今まで見たビデオに出てくるどの女の人よりもそそる。男なのに女よりエロいってそんなのありか。もうたまらなさすぎる。

「う、うあ、はあああん」

かわいい先輩が仰け反る。マットから背を上げてブリッジしている。

たくましいうでがその下へ滑り込む。大きなお尻を手のひら全体でなでまわす。

「ふあ、あく」

悶えているかわいい先輩を、ごつい先輩の一人が抱え上げる。

「新入り。尻触りたいだろ。ほれ」

かわいい先輩をごつい先輩がひざにのせる。かわいい先輩はたくましい首にうでを回してしがみついている。

まるで騎乗位しているみたいだ。先輩の大きな丸いお尻が眼前にどっしりと見せつけられる。

たまらない。僕は両手を伸ばしてそのお尻をわしづかみにした。

「あっん」

色っぽい声を出される。もう、もう、たまらなさすぎる。

「や、やわらかい」

僕は夢中でぎゅうぎゅう握る。いくら強く握っても先輩は痛がるどころか気持ちよさそうにあえいでいる。

他の先輩たちも手をのばし、かわいい先輩をまさぐる。お尻は僕だけに触らせてくれる。僕は夢中でお尻をなで回し続けた。

「そろそろ限界じゃないか？」

ごつい先輩が僕に聞く。

「は、はい、もう、触っているだけで射精しそうです」

「よーし。そろそろいい時間だしな。終わらせるか」

たくましい先輩に抱きついていたかわいい先輩が引き離される。さんざん身体をなぶられ続けてその表情はとろとろに蕩ろけきっていた。

「ほら、新入りがもう限界だってよ」

ごつい先輩は僕の背を押す。僕は女のようにしなだれ座るかわいい先輩の前に立たされる。

「あ、はあ、あ、うあ」

かわいい先輩は激しく息をしながらあえいでいる。さんざん触られたペニスは苦しそうに勃起しだらだらと先走りまみれになっていた。

「全員射精させるまで我慢するんだ。わかっているよな」

ごつい先輩にそう言われて、かわいい先輩はこくこくうなずく。

あれだけ触られまくったんだ。僕以上にもう限界のはずだ。なのにここにいる全員を射精させるまで我慢させられるなんて拷問だ。

かわいい先輩を苦しめている。とてももうしわけなく思う。でもそれと同時に、今まで感じたことの無い暗い悦びがあふれてきた。

その感情は耐えがたいほど狂おしく、そして気持ちよかった。

かわいい女みたいな先輩をいいなりにしている。支配している。それは恐ろしいほどドロドロした感情で、不味いののにその汚泥を飲まずにはいられなかった。

かわいい先輩がおずおずと手を伸ばす。

「あうっ」

じらされるように長い時間おあずけされていたペニスは、女の子

みたいな細い指に触られただけで電気が走るほど敏感だった。

「ふ、うあ、あう」

かわいい先輩が両手で僕のペニスをまさぐる。恥ずかしいほどばんばんに膨れ上がった肉棒を女の子になでられていると思うと快感が倍増した。

「先輩、かわいすぎる」

思わずつぶやく。ペニスをビンビンに勃起させていてなお女の子に見える。かわいい顔。いやらしい身体。女以上に女らしくてそそる。こんな人がいるなんて。出会えるなんて。最高すぎる。幸せすぎる。

「あっく、先輩、先輩いいい」

先輩の指がゆっくりと僕の肉棒を這い回る。じれったいほどゆっくりと、全ての指が別の生き物のように互い違いにうごめく。

「うああ、あああう、先輩、じらさないでえ」

もう限界だ。思い切りしごいて欲しい。僕は先輩の手を取ると、はちきれそうな竿を握らせた。

「も、もう出ちゃうから、しごいて。しごいて先輩。お願い」

僕の悲痛なおねだりをきいて、先輩が捨てられた子犬を見るような慈しむ目をした。

ドキッとした。こんな表情を見せられて、惚れない男はいない。僕はすっかり心を奪われてしまった。

先輩が両手で握り、ぐいっぐいっと大きくしごく。ほんの数回そうやってしごかれるだけでもうこみ上げてきた。

「あんっ、先輩っ、僕っ、もう」

全身をがくがくふるわせながら悶える。先輩はそんな僕を見てにっこり笑う。

「いいよ。でも今日のところは、まだ顔にかけちゃ駄目」

「だ、駄目？」

「そう。少しずつ、毎日少しずつね」

「毎日」

「毎日来てくれるでしょ？」

かわいい女の子にペニスをしごかれながら笑顔でおねだりされる。すっかり先輩に惚れてしまった僕が断れるはずがない。

「毎日来ます。毎日先輩とエッチしに来ます」

「あはは。部活に来るんでしょ。でもうれしい。絶対来てね」

完全な女の声。女の口調。女の顔。女の身体。男のペニスがそれ以外の女らしさを際だたせている。エロい。こんなエロい人に裸でペニスをしごかれている。

「ううう。もう出ちゃいます。もう、もう」

話の間泣きそうになりながら力を込めてふんばっていた。でもそれも限界だ。もう射精する。

「胸にかけて」

先輩が僕のペニスをぐいっと自分の胸にむける。それと射精は同時だった。

「うわっああああああ」

びゅるるんっと射精の号砲が鳴る。撃ち出された弾は瞬時に目標に命中する。

びゅぐんびゅぐんとすごい勢いで噴き出す精液が、先輩のかわいい胸を汚していく。

「あっく、うあ、エロい」

射精の快感。見る快感。汚す快感。触られる快感。

ただのオナニーとは違う。ありとあらゆる快感が同時に襲ってくる。射精だけでも桁違いなのに、他の快感まですごくて僕は大口開けて悶えまくった。

「あうっはあう、うっくう、くはああああ」

射精が無茶苦茶長い、気持ちよすぎる噴出を何度も何度も味わう。すごい。さんざん待たされたあとに出すところなのにも量が多くて、その分長く楽しめる。

びくっびくっと身体を跳ねさせながら、ようやく射精が終わった。

「うふふ。たくさん出たねえ」

先輩が自分のどろどろに汚された胸を見下ろしものすごくうれしそうに笑う。いやらしい笑い顔がまたかわいい。かわいくていやらしいなんて最高じゃないか。

先輩が僕のペニスを強く握って根本からぎゅっぎゅとしごいてくれる。射精直後のペニスに甘い快感がずくずく沸き上がる。

「せ、先輩、もう」

「全部出た？」

「で、出ました」

「本当かなあ。ほら」

根本からしごき出されて、ぷくっと一滴鈴口から染み出した。先輩はそれを指で取ると僕に見せつける。

「まだ残ってたあ」

「す、すいません」

すごく恥ずかしい。そしてかわいい子とそんな恥ずかしいやり取りをしているのがまるで恋人同士みたいで甘酸っぱくてくすぐったかった。

「どうだ。気持ちよかったか」

「は、はい」

ごつい先輩に肩を叩かれる。僕は笑顔で答えた。

「すっきりした顔しているなあ」

「そりゃあもう。ものすごくよかったです」

「そうかそうか。よかったな。いい部活だろ。ここへ来れば毎日こんな気持ちいいこと出来るぞ」

「でも、いいんですか。こんなこと」

「またか。心配性だな。あの表情見ろって」

促されるままかわいい先輩を見る。先輩は二人のごつい男たちのペニスを両手でしごきながら、うれしそうに舌なめずりをしている。

「あれがいやがっているか？ 喜んでいるだろ。あいつ女扱いされるのがうれしいんだよ。女のプライドを満たす一番の方法は男が勃起し射精することだ。あいつは喜ぶ。俺たちは気持ちいい。な。どっちもいいことばかりだろ。もっと楽しめよ。いろいろと」

ごつい先輩が僕を後ろから抱きしめる。そして僕のまだ大きいままのペニスを握る。

「あ、先輩」

「ほら、見ていろ。男二人に女が手コキしているの、ビデオとは迫力が違うだろ」

たしかにすごい。ビデオはいくら見てもビデオにしか過ぎない。

生の迫力。匂い、熱気。全てが違い過ぎる。ビデオでは決して得られないエロさがあった。

快感が走る。ごつい先輩の手でしごかれて、僕のペニスはまた硬くなった。

「先輩、あぐ」

「あいつ女みたいだろ。でも男だ。触って気持ちよかっただろ。男に触られて気持ちよかっただろ」

「は、はい」

先輩に、ごつい男の手で握られしごかれている。普通ならいやなはずなのに、このエロすぎる雰囲気ではいやさよりも気持ちよさばかりに気がいく。

「どうだ、俺の手は」

「き、気持ちいいです」

「だろ。相手が男か女かなんて関係ないんだ。誰に触られたって気持ちいいんだからな」

先輩が片手で僕のペニスをしごきながら空いている手で僕の手を握る。そして自分の勃起ペニスに導く。

「せ、先輩」

「お前もしごきたいだろ。遠慮するな」

「で、でも」

「俺も気持ちよくしてやるから。お前も気持ちよくしろ」

もう滅茶苦茶だ。さっきまでかわいい子を触って、触られて、その余韻が引かない内に今度はたくましい男に触られ触る。

頭がのぼせている。茹だっている。冷静に考えればおかしいのに、僕は促されるまま快感に身を任せ、そして奉仕してしまった。

「う、お、そうだ。いいぞ。たどたどしいけど、初初しくてすごくいい」

「本当ですか。うれしい」

なぜかうれしく思ってしまう。僕の女の部分が、男を喜ばせられることに悦びを感じる。

「前見ていろ。あいつのダブル手コキ、よく見て覚えておけよ。お前もそのうちするんだから」

「ぼ、僕も？」

「ああ。今日はその練習一日目だ。上手いぞ。気持ちいい。お前、男のペニスしごくのが上手いな」

「せ、先輩こそ、あん、上手」

本当に、おせじ抜きで上手い。さっき射精したばかりの僕のペニスが、先輩の巧みな手つきでもうガチガチに硬くなっている。

「はあ。本当は、今日のところはまだ何もしないつもりだったが、

お前がかわいすぎて、つい」

「僕が、かわいい？」

「ああ。あっちの連中は夢中になっているからこっちに気付いていない。今こうしているのは俺とお前だけの秘密な」

かわいい先輩はこっちを向いて、ごつい先輩数人がこっちに背を向けて取り囲んでいる。でもかわいい先輩は目の前のペニスを見るのに夢中で僕たちがしていることに気付いていない。

「僕たちだけの、秘密」

「そうだ。かわいがってやるからな。気持ちいいだろ」

先輩の手が激しくなる。ごつい大きな手。かわいい先輩のやわらかい手とはまるで違う。なのにこれはこれで気持ちよかった。自分でも信じられないほどこの快感にはまった。僕の中の女が、男にいじられることを心底喜んでいた。

「ほら、俺のもしごけ。あっちの連中にばれないうちに射精するぞ」

「は、はい」

かわいい先輩の手コキで気持ちよくなって、それだけで終わるはずが急にこんなことになって、男に触られているのにまるでいやじゃない自分におどろいて、ごつい先輩の繊細な手つきが意外で、でも気持ちよすぎて。

「あ、は、先輩、出る」

「俺も、もっと早くしごけ。一緒に、出すぞ」

そう言われて僕は必死にしごいた。後ろから抱きつかれ、ペニスをしごかれ、相手のペニスをしごいてあげている。人のペニスをしごくのは自分のとは勝手が違う。でも普段自分のをしごいているからこつをつかむのは早かった。

「お、いいぞ、俺の手つきを真似ているな。上手い、く、これは、やばい」

「僕もう出ちゃうから、出してください、一緒に、一緒に」

茹だった頭で雰囲気の流れで、僕はおかしくなっていた。自分が女として、男のペニスをしごいてあげていることに酔いしれていた。女として、男に性器をいじられイカされることにおぼれていた。

「あっふ、先輩、出るうううう」

「わかった、俺も、出す、うううう」

先に僕が出た。一瞬遅れて、先輩も射精した。

二本の白い矢が放たれ放物線を描く。床にぼたぼたと落ちていく様はなんだか美しかった。

「はっあ、うは、ああ」

二人とも腰をよじって悶える。互いのペニスを強く握って離さない。動く度にしごかれて、それがさらに射精を促す。

「ううう、あああ」

ごつい先輩がぎゅううと力強く僕を抱きしめる。女がたくましい男に惚れる気持ちがわかる。力強く抱きしめられると自分の全てを包み込んでくれる大きさを感じる。自分の全てを委ねて守ってもらいたくなる。

ドキドキする。どうして。相手は男なのに。さっきかわいい先輩に惚れたときと同じくらいドキドキしていた。

僕、まさか。

ありえない。相手はごつくて、顔がいいわけでもないし、何より男だぞ。女みたいな先輩とは違うんだぞ。

でも、こんなにペニスをしごいてしごかれて、射精までさせられて、嫌悪でなく温かい物がこみあげてくるのはどうしてなんだ。

思考も感情もぐちゃぐちゃだ。全裸で汗まみれで射精までして。快感に身体も心もどっぷり浸かって、もうわけがわからない。

「はあ、はあ、最高だったぞ。お前の手コキ」

「僕も、先輩の手コキ最高でした」

「ああ、それとな」

「はい？」

「お前、まだ全員の顔と名前覚えていないだろ。まあお前はかわいいあいっばかり見ているからな。他がみんな同じジャガイモみたいに見えているんじゃないか」

「そんなことは」

「俺部長だからな。覚えておけよ」

「部長」

「そうだ。はあ。お前かわいいな」

部長が僕をぎゅっと抱きしめる。ドキドキする。まるでいやじゃないことに何度でもおどろいてしまう。

「かわいがってやるからな。明日もちゃんと来いよ」

「はい」



冷静なら断るだろう。でも僕は冷静ではなかった。だから素直に即答した。

「いい子だ。ほら、向こう見に行こう」

僕たちは向こうへ近づく。かわいい先輩の胸やお腹や足が精液まみれでドロドロだ。もちろん勃起したペニスにも精液がかかっている。

「はあ。あは。ああん。また出る？ まだ出る？」

かわいい先輩はもうとろとろだった。自分が何をしているのかわかっているのだろうか。

二本のペニスを激しくしごいている。すごい手つきだ。ただ動かしているのではない。巧みにひねりを入れたり指が複雑に動いたりする。

参考になるなあ。僕も練習しなくちゃ。

練習。何のために？

ちらりと、隣にいる部長を見上げる。

部長は真剣な顔つきだ。まあエロい物にかぶりついているだけだが。それでもごつい顔が何だか格好よく思えた。

本当に僕は変だ。さっき手でしごいて射精させてもらったから、情でもわいたのだろうか。

きっとそうだ。僕が好きなのはかわいい先輩だ。それがすぐに、ごつい部長にも惚れるなんてあるわけがない。

「あん、また出たあ」

かわいい先輩が、自分の胸にかけられる精液をながめながらうれしそうに笑う。

「はあはあ。三発も出しちゃったよ」

今出したばかりのごつい先輩が下がる。

「ううう、こっちも」

もう一人、しごかれていた方も射精する。

「かけてかけて、もっとかけてえ」

かわいい先輩はうれしそうにおねだりする。

「も、もう出ねえよ」

どうやら一回だけでなく、二回三回と手でしぼり出されたようだ。かわいい先輩は首から下が精液まみれで大盛況だった。

「あーん、もう終わり？ しかたないなあ」

かわいい先輩が全身の精液を手でなでる。そのまま手を滑らせて、びんびんに上を向いた自分のペニスを握る。

「じゃあねえ、見てえ、女の子が射精しちゃうところ、見てえええ」

本当に女の子かと思うほど女らしい。声なんてもう完全に女じゃないか。精液まみれでいやらしい女が、自分のペニスを握ってしごく。

「あん、ぬるぬるう。みんなの精液ローションだあ」

すごく気持ちよさそうな顔をしている。あんなにぬるぬるでしごかれるのってどんなに気持ちいいのだろう。

「ふ、あ、出ちゃう」

さんざんすぎるほどじらされきったペニスはすぐに限界を迎えたようだ。真上にびゅると噴水が上がる。

「あっはあああああああ」

女の子が後ろに片手をついてのけぞりながら射精する。精液まみれで精液を噴き出す。なんて淫靡な光景だ。

「あ、あはっ、あっあっ」

ぐちゅぐちゅと音を立ててしごく。びゅっびゅと何度も射精する。

ううういやらしい。また勃起しそう。二回抜いてなければやばかった。

「ああ、はあ、ああああ、はあああ」

かわいい先輩ががくがくけいれんする。

「だ、大丈夫なんですか」

僕は心配して周りの人に聞く。

「大丈夫大丈夫」

「精液大好きだからな。こんなにつけられて、悦びすぎてるんだろ」

「本気でセックスするときは、こんなもんじゃないぞ。獣かってくらい吠えて暴れるぞ」

「セ、セックス」

やっぱり、セックスまでしているんだ。うすうすそうじゃないかと思っていただけ、やっぱり最後までしているんだ。

「おい、言ってしまうっていいのかよ」

「いって。さすがにここまで来たら、なあ」

ごつい先輩の一人が僕の肩を叩く。

「もうわかっているだろ。この部活は、こいつを女代わりに楽しむ

部だって」

ごつい先輩が意地悪そうな目で僕を見る。僕はこくこくとうなずく。

「お前もこいつとセックスしたいよなあ」

顔が熱くなる。恥ずかしすぎてうつむく。

「まだ早いかな？　まあ一気に最後までしたらおもしろくないだろ。セックスはあとからさんざん出来るんだ。今のうちだけ、童貞のまま楽しんでおけよ」

僕は何と言って返事すればいいかわからなかった。

「童貞のうちしか味わえない気持ちよさってのがあるからな。しっかり楽しんでおけよ」

「は、はい」

何度も肩を叩かれて、同意せざるを得ない。

「ほれ。拭いてやれ」

タオルを手渡される。僕はマットの上で寝転び身体をびくびくさせているかわいい先輩の身体を拭く。

「あの、大丈夫ですか」

「大丈夫う。全然足りないいい」

「今日はもう時間が時間ですし、帰りますよ」

「んんん、いけずう」

「いけずってそんな」

いつもやさしくほほえむ先輩が、こんなに乱れるなんて。相当な好き者だ。精液かけられオナニーしただけなのに、まるでセックスでイカされたみたいにいけいれんしている。

すごいやらしい。この人とセックス。初体験。筆下ろし。童貞喪失。

いやじゃない。むしろうれしい。男相手でもお尻の穴でもいい。この人で童貞を失いたい。

「うっふう。今日は手だからあ、明日はもっとすごい事してあげるう」

「す、すごいことって？」

「んふふう。明日のお楽しみい」

先輩の身体を拭きながら、僕は期待が高まってしかたなかった。

# 女装セックス、童貞喪失

「あ、む、んちゅ、ん」

僕はマットに寝て、スクール水着を着た先輩にのしかかられていた。

舌をからめてキスをしている。女装デッサンの最中だ。ポーズを取ったら一分間じっとしていないといけない。だから抱き合い舌を入れてキスしたままじっとしていた。

僕は体操服とブルマを着ている。女装すると心まで女の子になってしまう。僕は女の子として押し倒されキスをされて喜んでいた。

「部長、もう暴れないでくださいよ」

「わかっている」

部長は僕のことが好きらしい。しかたないとはいえ僕が目の前で他の男とキスしてうっとりしていると嫉妬が止まらないらしい。

しゃっしゃと鉛筆の音が聞こえる。耳に心地よい。描かれている。恥ずかしい姿を描かれている。それは写真を撮られるのと同じように、いやそれ以上に羞恥心をかき立てる。写真のような一瞬ではない。何度もじっくり細部まで見られそれを写し取られる。見るだけならそこまで見ないという細部までしっかり観察される。

「よし、次のポーズ取って」

そう言われてスクール水着の先輩が僕から離れる。僕はそれを追うようにして抱きつく。

「せ、先輩、もう、セックス」

「じゃあ君のお尻に入れてもいい？」

「そっちじゃなくて、僕が、先輩に」

「お尻に入れてもいいって言わなきゃ駄目」

「も、もう、限界です。射精しちゃいます」

「じゃあ次はこれ」

先輩が僕をまた寝かせる。僕のブルマをちょっとずらしてすそからギンギンペニスを引っ張り出す。

「あ、く、もう、触られたら、出ちゃう」

「駄目。我慢して」

先輩が僕にお尻を向けて跨る。

「先輩、入れていいですか」

「だめ」

先輩はマットにひざをついて尻を浮かせる。スクール水着を少しずらしてお尻の穴を見せる。

「せ、先輩の、穴」

そこは薄いピンクで毛が生えて無く、とても純真無垢だった。周りにいるたくましい先輩たちのペニスをさんざん受け入れているとは思えないほどきれいで、まったく使っていないように見えた。

「ぬ、濡れてる」

「君とセックスしたくて、さっきからおつゆがあふれて止まらないの」

濡れそぼった淫穴を僕の亀頭にくっつける。くちゅりといやらしい水音が奏でられる。

「あうっ」

「さ、今度はこのポーズよ。じっとしていて」

先輩が背を向けたまま首だけこっちに向けてほほえむ。

「そ、そんな、こんなことされたら、もう我慢出来ません」

「押し込むだけで、つるんと入っちゃうよ。君の童貞ペニスが簡単に入っちゃうよ」

「い、入れたい。入れていいですよ」

「駄目。君がお尻使っていいって言うまで駄目」

「こんなの、ずるい、もう、こんなの我慢出来ない」

「だって君にそう言わせるためにしているもの。ふふふ。もう堕ちちゃいなさいよ。君が怖がっているほど痛くないから、男を受け入れちゃいなさい」

「だ、め、僕は、僕は」

「私も君に入れたいなあ」

「は、あああ。そんな甘い声でおねだりしないで」

「たまらないでしょ」

「た、たまりません」

「いつまでも我慢出来ないの自分でもわかっているでしょ。もうさんざんじらされて辛いでしょ。そろそろ楽になっていいのよ」

「でも僕、でも僕」

「本当は、ちょっと興味あるでしょ。お尻に入れられるの」

「僕は、はあ、僕、あ」

「これ以上じらされたら射精しちゃうよ。これだけ我慢して暴発しちゃうともったいないよ」

「うううう。ううううう」

「私の中で、気持ちいい射精したくない？ 童貞喪失して、思い切り中出ししたくない？」

「し、したいです」

「じゃあ言って。僕に入れてもいいからセックスさせてくださいって」

「ぼ、僕に、入れても」

「うん」

「いいから」

「うん」

「セックス」

「うん」

「は、あ、やっぱり、駄目、怖い」

「ねえ」

「はい？」

「君と同じくらい、私ももう我慢出来ないの。さっきから何度も身体を重ね、キスをして、ペニスをこすり合わせ、お尻をなで回して」

僕がなかなかお尻を許さないから先輩も許してくれない。もう女装デッサンをして大分経っていた。

きっと僕がお尻を許すまでずっと続ける。僕はもう、最後まで我慢出来そうにない。そしてもうわかっていた。我慢したくない。ペニスだけではない。お尻もうずいて、みんなに欲しがられて、僕でいいなら、僕を滅茶苦茶にしてほしいとさえ思っていた。

セックスしたい。セックスされたい。頭が茹であがっている。身体が火照っている。でもどうしても、最後のふんざりがつかない。

かわいい先輩が、腰をわずかに揺する。濡れた菊座に亀頭がこすられくちゅくちゅと音を立てる。

「駄目、もう、動かしたら、出る」

「私も切ないのよ」

「先輩」

「お願い」

「そんな顔で、言われたら、駄目です。僕、我慢、出来なく」  
「入れて」

頭の中で、か細くなっていた抵抗の糸がぷつぷつと切れる。

「先輩！」

僕は目の前の大きなお尻を両手で抱える。

「僕に入れてもいいから、お尻使ってもいいから、入れさせてください。僕の童貞、もらってください」

「よく言えました」

先輩が本当にうれしそうに笑う。そして腰を落とす。僕はそれに応じるように腰を突き上げる。

ずるん。濡れた小さな肛門は、おどろくほど大きく広がり僕の亀頭をあっさり飲み込んだ。

「うあ、あああ」

「我慢して、根本まで入れて」

射精がこみ上げる。僕は急いでさらに腰を突き出す。

「ああああああ」

ずぶんと音を立てて、根本まで一気に押し込んだ。

「うあ、あ、これ、中」

熱い。濡れてる。締まる。絡みつく。

「あんあんあんあん」

先輩が大きく腰を振る。大きなお尻がずばんずばんと音を立てて上下に暴れる様は圧巻だった。

「あああ、出る出る出ちゃうよ先輩」

「我慢して」

「無理いいい」

とっくに限界までこみ上げた精液を、ぎりぎりど歯を食いしばり押し止める。

「う、は、こんな、熱い、うあっは」

「我慢して、はあ、童貞ペニス、もうちょっと味わわせて」

限界までじらされたあと、ここまで気持ちいい肉壺に包まれ激しく犯される。先輩のお尻は一ヶ月も餌にありつかなかった野獣のように荒々しく僕を貪る。かわいい外見からは想像も出来ない激しいセックスだった。

「僕もう、本当に、うあ」

「我慢して、おいしいの、童貞ペニス、中で跳ね回ってすごく元気で、あん、気持ちいい、最高。童貞最高」

「先輩、先輩、もう無理、もう無理」

「我慢、我慢、あっはあ、気持ちいいいいいいいいいい」

「先輩！」

僕はがばっと身体を起こす。そして先輩の背中にしがみつく。

「離して。もっと食べさせて」

僕は先輩にぎゅううとしがみつки、そして我慢させ続けたペニスを解放した。

「あ！」

先輩の中に、どぐっどぐっ注ぎ込む。先輩はとても切ない悲鳴を上げた。

「や、あ、まだなのに、どうして出しちゃうのお」

「ご、ごめんなさい、でも」

先輩をさらに抱きしめる。腰を揺すりながら気持ちいい中出しをする。

「はああ、出てる、私の中に、たくさん出てる」

「先輩の、中、はあ、あ、気持ちいい、です。熱い、です」

「君の精液の方が熱いわ」

「先輩の、中、うねる。うう。絡んでくるう」

「あはあ。これみんなに喜ばれるの。膣に比べて絡みつかせるの難しいらしいわ。これ出来るようになるまでたくさん練習したんだからあ」

「お尻の穴って、こんなに、締め付け、僕、ちぎれそう」

「大丈夫よお。本当に食べちゃいたいくらいだけどね。締め付けきついでしょ」

「は、はい、こんな、強く、締め付けて、あうう」

「膣より何倍もきついらしいわよお。それだけ気持ちいいらしいわよお」

本当に、これ以上の締め付けなんて考えられない。男のお尻の穴。何て強い締め付けなのだろう。その万力のような力で締められながら搾り出されるのはもうたまらない。

「先輩、気持ちいい。先輩、好き」

「私も好き。君の初めての相手になれてうれしい」



「僕も、先輩が初めてで、うれしいです。うううううう」

長い射精。気持ちよすぎる射精。めまいがする。それがようやく終わる。

「あふう、ううう」

「全部出した？」

「は、はい」

「じゃあそろそろ、離れようか」

「もう少し、このまま」

「もう、甘えん坊さん」

本当の恋人みたいに抱きしめる。本気で好きだ。この人を愛している。ずっとこうして繋がっていたい。

僕の肩に手が置かれる。二人きりの世界に浸っていたので急に他の手が出てきてびっくりする。

「童貞卒業おめでとう」

部長だった。

「ところで、さっき言ったよな。お尻、いいんだよな」

「え、あの」

「もう待ちきれないんだ。ほら」

部長が僕の目の前に巨大なペニスを突きつける。

「ひっ」

「大丈夫。やさしくするから」

部長は僕とスクール水着の先輩を引き離す。まだ硬いままのペニスが先輩のお尻から抜けてしまう。

部長が僕を押し倒しキスをする。

「あ、む、部長、待って」

「もう待てない」

部長の手が僕のお尻をなでまわす。そのまま割れ目に指を這わせる。

「そこは、あああ」

「気持ちいいだろう」

太い指が、その外見とは裏腹に繊細な動きでやさしく蕾を愛撫してくる。軽くつけて小刻みに振動し、快感の花を咲かせる。

「はあああ、う」

「いい声だ。お尻をいじられると女の声が出るだろ？ いいんだぞ。」

声を我慢しなくて」

さっきセックスして、何かが吹っ切れた。僕は快楽を我慢しなくなっていた。

「あ、ん、は、気持ちいい。そこ気持ちいい」

部長は僕にキスをしながら菊座を指でいじる。そして同時に乳首もつねってきた。

「あうん」

「こりこりだな。ここまで尖っていたら、強くする方が気持ちいいだろ」

「うん、うん、気持ちいいです、部長の指、気持ちいいですう」

「こっちはもっと気持ちいいぞ」

部長が僕にペニスを握らせる。

「うううん、部長、太おい」

「欲しいだろ。な。欲しいだろ」

「あん、でも、大きすぎる」

「入れていいんだろ。いって言ったよな。もう止まらないぞ」

「ぶ、部長。はあ、あ」

部長にキスされると幸せだ。男に抱かれるってこんなにうれしい気持ちになるんだ。

「ん、大分濡れてきたな。いい穴だ。男を欲しがっている。よし、今度はなめてやろう」

「ぶ、部長、待って」

「ん？ 何だ」

もう部長とセックスするのがいやなわけではない。ただ、あんな大きいものをいきなり入れるのはやっぱり怖い。それに、僕のお尻で先に射精させてあげたい人がいる。

「あの、部長には悪いんですけど、僕」

スクール水着からペニスを露出させている先輩を見る。

「僕のお尻の初めては、あの人にもらって欲しいんです」

「何だと！」

「部長落ち着いて」

ごつい男たちはもう慣れたものだ。今日何度目になるのだろうか。スムーズな連携で部長の手足にしがみつく。

「いいの？」

かわいい先輩がうっすら涙を浮かべて僕を見る。

「いいんです。だってもう、辛いでしょ」

女装デッサンの間何度も僕にこすりつけてきたペニス。先輩のペニスはもう勃起しすぎて濃い赤黒になっていた。

「お前の処女は俺がもらう取り決めなんだ。許さんぞ。キスも童貞も奪っておいて、その上処女までなんて許さんぞお」

「部長、落ち着いて。そんな娘はやらんぞって言うお父さんみたいなこと言わないで」

「誰がお父さんだあ」

部長は手足にしがみつく男たちを引きずりながらじりじりとこっちへ近づく。

「部長」

僕は部長に歩み寄る。

「何だ」

部長は僕をにらむ。

「部長は僕のこと、好きですか」

「好きだ。大好きだ。お前がこの部屋へ初めて来たとき、一目で惚れてしまったんだ」

「どうして」

「何か、守ってあげたくなるような、おどおどした子犬みたいな目をしていて。さびしそうだった。だから俺が、そばにいてやりたいと思った」

「あは。何だか恋愛漫画みたいですね」

「茶化すなよ。一目惚れなんて初めてで、もういてもたってもいられないんだ」

「うれしいです。僕もそんなに想ってもらえて、悪い気がしません」

「じゃ、じゃあ」

「でも、部長のこれ、はっきり言って大きすぎますよね。初めてがこれだと、僕壊れちゃいます」

「ちゃ、ちゃんとほぐして慣らせば大丈夫だぞ」

「はい。だから初めは部長より小さいので慣らしておこうと思います」

僕はそばまで来ていたスクール水着の先輩のペニスをきゅっと握る。

「駄目だ駄目だ。俺はお前のこと、本当に好きなんだぞ。お前の初めてを何もかも目の前で奪われるなんてあんまりじゃないか」

「わかっています。その気持ち、本当にうれしいんです。だから僕が部長にあげられる初めてをもらってください」

僕は部長の前に跪き、猛々しくそびえ勃つペニスにキスをした。

「お、お前」

「僕のお尻は駄目ですけど、お口の初めてをあげます。それで我慢してもらえませんか。もちろん、お尻が慣れたら部長のも入れていいですから」

「う、む」

僕は目を瞑って、ちゅっちゅと部長のペニスにキスを繰り返す。

「し、しかしだな」

「部長」

僕は目を開けて、上目遣いで部長を見上げる。

「僕も、部長のこと好きですよ。そんなに強く好きになってもらえて、今日何度も嫉妬してもらえて、惚れない女はいません。僕、部長のために、かわいい女になります」

ちゅっちゅっちゅっちゅ。何度も強く裏筋に吸いつく。

「う、おおお、お」

「だから、いいですよ。部長のいきなり入れたら僕壊れちゃう」

「し、仕方ないな。い、いいだろう」

周りのみんながほんとに安堵のため息をもらす。ようやく部長が暴れる危険が去ったのだ。これであとはもう、気持ちいいことを存分に楽しむだけだ。

スクール水着の先輩がブルマの上から僕のお尻をなでる。

「本当に、私が初めてでいいの？」

「はい。僕の処女も、もらってくれますか？」

「もちろん。うれしいわ。大好き」

「僕も好きですよ」

僕たちはうっとり見つめ合う。部長もさすがにもう何も言わなかった。

# 原作利用権

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

漫画、小説、ゲーム、動画、絵本、演劇、映画などあらゆる作品の原作として使用できます。

アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版など無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。

原作：二角レンチ

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

二角レンチが作成、販売している原作利用権付き作品を購入した方は、以下に記載する二角レンチのブログ内の全ての作品についても原作利用権を有するものとします。

<http://originalmagazine.seesaa.net/>

<http://stockstackstory.seesaa.net/>

# プリンタでの印刷方法

この PDF は印刷して読みやすいようにデザインされています。

1. A 4 コピー用紙を用います。
2. 印刷範囲で「すべて」または「ページ指定」をします。
3. 「両面で印刷」「綴じ方：左」で「小冊子の印刷」をします。
4. 両面印刷で一枚につき 4 ページが印刷されます。
5. 中綴じ用ホチキスなどで綴じます。
6. 二つ折りにすると完成です。

A 5 サイズで手軽に読みやすい文字サイズになっています。

(注：お手持ちのプリンタがこれらの機能に対応している場合に限りです)

# 奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名

男子美術部女装デッサン 体験版

発行日

2012 年 6 月 9 日

著者

二角 レンチ

ブログ・連絡先

<http://originalmagazine.seesaa.net/>